

2025 年 11 月 20 日

老々介護の事件は特別ではない!?

2024 年 7 月、東京都国立市で 71 歳の女性が同居していた 102 歳の母親を殺害するという痛ましい事件が起こり、その後の裁判で、事件の背景が明らかになってきました。

71 歳の娘と 102 歳母親は二人暮らし。母親は、102 歳という年齢を考えれば当然だと思いますが認知症の症状があり、要介護認定を受けてケアマネジャーがつき、訪問介護、訪問看護等のサービスを受けていたようです。そして、自宅から 1 時間ほどの距離のところに妹家族がいたとのことでした。



母親はトイレが頻回で、都度、娘に連れて行ってくれとせがんでいたそうですが、娘も高齢ですから腰を痛めてしまい、トイレに連れていくのが難しい状況になってしまいました。そこでケアマネに相談し、母親に紙おむつを使ってもらうようになりましたが、それでも母親は 10 分おきに娘に連れて行くようにせがむことを止めなかったそうです。娘が「紙おむつだからトイレに行かなくても大丈夫」といっても母親は聞き入れず、ベッドから転落してしまいました。しかし、娘は腰の痛みで母親をベッドに助け上げることができません。そこで娘は 110 番通報しましたが、119 番の救急隊に連絡するよう言われたそうです。救急隊はすぐに駆けつけてくれて母親をベッドに戻し、親切に対応してくれたのですが、最後に「こういうことは今日限りですよ」と釘を刺されてしまったそうです。

救急隊が帰った 10 分後から、再び母親のトイレに連れて行ってほしいの懇願が始まり、娘はその 1 時間半後、母親の首を絞めるなどして殺害してしまったそうです。

110 番の警察も、119 番の救急隊も、誰も間違ったことはしていないし、言っていない。しかし「こういうことは今日限り」と言われた娘は「胸に鉛が入ったかのように重く感じ、絶望感に襲われ、もう駄目だと思った」と証言しています。

「絶望感」という言葉がキーワードです。今ある制度を使っている、認知症高齢者の介護を家族がひとりで担っている時間が長いと、それだけで孤独感や絶望感に押しつぶされそうになることが想像できます。

もちろん、孤独や絶望があるからといって、人を殺してよい理由にはなりません。この娘は、当然に罪を償わなければなりません。しかし、この事件の背景を聞いて「誰にでも起こり得るものだ」という感想を抱かずにはいられませんでした。

家族の介護をするということが、こんなにも孤独と絶望と隣り合わせになりやすいということに誰もが思いを致し、当事者が SOS を発しやすくする場を、そしてその SOS の深刻度を見逃さない仕組みを作っていないかなければならないと感じています。